

風と光と二十の私と

坂口安吾

青空文庫

私は放校されたり、落第したり、中学を卒業したのは二十の年であった。十八のとき父が死んで、残されたのは借金だけということが分つて、私達は長屋へ住むようになった。お前みたいな学業の嫌いな奴が大学などへ入学しても仕方なからう、という周囲の説で、尤も別^{もつと}に大学へ入学するなという命令ではなかったけれども、尤もな話であるから、私は働くことにした。小学校の代用教員になったのである。

私は性来放縦で、人の命令に服すということが性格的にできない。私は幼稚園の時からサボることを覚えたもので、中学の頃は出席日数の半分はサボった。教科書などは学校の手の中へ入れたまま、手ぶらで通学して休んでいたもので、休んで映画を見るとか、そんなわけではない。故郷の中学では浜の砂丘の松林にねころんで海と空をボンヤリ眺めていただけで、別段、小説などを読んでいたわけでもない。全然ムダなことをしていたので、これは私の生涯の宿命だ。田舎の中学を追いだされて、東京の不良少年の集る中学へ入学して、そこでも私が欠席の筆頭であったが、やっぱり映画を見に行くなどということは稀で、学校の裏の墓地や雑司^{ぞうし}ヶ谷^やの墓地の奥の囚人墓地という木立にかこまれた一段^{たんぷ}歩ほどの草原でねころんでいた。私がここにねころんでいるのはいつものことで、学校をサボる私の

仲間はこちらへ私を探しにきたものだ。Sというそのころ有名なボクサーが同級生で、学校を休んで拳闘のグラブをもってやってきて、この草原で拳闘の練習をしたこともあるが、私は当時から胃が弱くて、胃をやられると一ぺんにノビてしまうので、拳闘はやらなかった。この草原の木の陰は湿地で蛇が多いのでボクサーは蛇をつかまえて売るのだと云って持ち帰ったが、あるとき彼の家へ遊びに行ったら、机のヒキダシへ蛇を飼っていた。ある日、囚人墓地でボクサーが蛇を見つけ、飛びかかってシツポをつかんでぶら下げた。ぶら下げたとたんに蝮まむしと気がついて、彼は急に恐怖のために殺気立って狂ったような真剣さで蛇をクルクルふりまわし始めたが、五分間も唸うなり声ひとつ立てずにふり廻していたものだ。それから蛇を大地へ叩きつけて、頭をふみつぶしたが、冗談じゃないぜ、蝮にかまれて囚人墓地でオダブツなんて笑い話にもならねえ、と呟つぶやきながらこくめに頭を踏みつぶしていたのを妙に今もはつきり覚えている。

私はこの男にたのまれて翻訳をやったことがある。この男は中学時代から諸方の雑誌へボクシングの雑文を書いていたが、私にボクシング小説の翻訳をさせて「新青年」へのせた。「人心しんしん攪しゅうらん術」というので、これは私の訳したものである。原稿料は一枚三円でお前に半分やると云っていたが、その後言を左右にして私に一文もくれなかった。私

が後日物を書いて原稿料を貰うようになっても、一流の雑誌でも二円とかせいぜい二円五十銭で、私が三円の稿料を貰ったのは文筆生活十五年ぐらいの後のことであつた。純文学というものの稼ぎは中学生の駄文の翻譯に遠く及ばないのである。

私はこの不良少年の中学へ入学してから、漠然と宗教にこがれていた。人の命令に服すことのできない生れつきの私は、自分に命令してそれに服するよろこびが強いのかも知れない。然し非常に漠然たるあこがれで、求道のきびしさにノスタルジイのようなものを感じていたのである。

凡そおよ学校の規律に服すことのできない不良中学生が小学校の代用教員になるといふのは変な話だが、然し、少年多感の頃は又それなりに夢と抱負はあつて、第一、その頃の方が今の私よりも大人であつた。私は今では世間なみの挨拶すらろくにできない人間になつたが、その頃は節度もあり、たしなみもあり、父兄などともつたいぶつて教育家然と話をしていたものだ。

今新潟で弁護士に伴純という人が、そのころは「改造」などへ物を書いており、夢想家で、青梅の山奥へ掘立小屋をつくつて奥さんと原始生活をしていた。私も後日この小屋をかりて住んだことがあつたが、モモンガーなどを弓で落して食つていたので、私が住んだ

ときは小屋の中へ蛇がはいってきて、こまった。この伴氏が私が教員になるとき、こういうことを私に教えてくれた。人と話をするときは、始め、小さな声で語りだせ、というのだ。え、なんですか、と相手にきき耳をたてさせるようにして、先ず相手をひきずるようにしたまえ、と云うのだ。

私の学校の地区に、伴氏の友人で藤田という、両手の指が各々三本ずつという畸形児でなます鯰ばかり書いている風変りな日本画家がいる。一風変った境地をもっているから一度訪ねてごらんさい、と紹介状をくれたので、訪ねてみたことがある。今日はただ挨拶にきただけだ、いずれゆっくり来るからと私が言うのに、いや、そんなことを云わずに、サイダーがあるから、ぜひ上れという。無理にすすめるので、それでは、と私が上ると、奥さんをよんで、オイ、サイダーを買ってこい、と言うので、これには面喰ったものだ。



私が代用教員をしたところは、世田ヶ谷の下北沢というところで、その頃は荏原郡えぼらと云い、まったくの武蔵野で、私が教員をやめてから、小田急ができて、ひらけたので、その

ころは竹藪だらけであった。本校は世田ヶ谷の町役場の隣にあるが、私のはその分校で、教室が三つしかない。学校の前にアワシマサマというお灸きゅうだかの有名な寺があり、学校の横に学用品やパンやアメダマを売る店が一軒ある外は四方はただ広茫かぎりもない田園で、もとよりその頃はバスもない。今、井上友一郎の住んでるあたりがどうもその辺らしい気がするのだが、あんまり変りすぎて、もう見当がつかない。その頃は学校の近所には農家すらなく、まったくただひろびろとした武蔵野で、一方に丘がつらなり、丘は竹藪と麦畑で、原始林もあつた。この原始林をマモリヤマ公園などと称していたが、公園どころか、ただの原始林で、私はここへよく子供をつれて行つて遊ばせた。

私は五年生を受持つたが、これが分校の最上級生で、男女混合の七十名ぐらの組であるが、どうも本校で手に負えないのを分校へ押しつけていたのではないかと思う。七十人のうち、二十人ぐらい、ともかく片仮名で自分の名前だけは書けるが、あとはコンニチハ一つ書くことのできない子供がいる。二十人もいるのだ。このてあいは教室の中で喧嘩けんかばかりしており、兵隊が軍歌を唄つて外を通ると、授業中に窓からとびだして見物に行くのがある。この子供は兇暴で、異常児だ。アサリムキミ屋の子供だが、コレラが流行してアサリが売れなくなつたとき、俺のアサリがコレラでたまるけえ、とアサリをくつて一家中

コレラになり、子供が学校へくる道で米汁のような白いものを吐きだした。尤もみんな生命は助かったようである。

本当に可愛い子供は悪い子供の中にいる。子供はみんな可愛いものだが、本当の美しい魂は悪い子供がもっているのです。あたたかい思いや郷愁をもっている。こういう子供に無理に頭の痛くなる勉強を強いることはないのです、その温い心や郷愁の念を心棒に強く生きさせるような性格を育ててやる方がいい。私はそういう主義で、彼等が仮名も書けないことは意にしなかつた。田中という牛乳屋の子供は朝晩自分で乳をしぼって、配達していたが、一年落第したそうで、年は外の子供より一つ多い。腕つぶしが強く外の子供をいじめるといので、着任のとき、分教場の主任から特にその子供のことを注意されたが、実は非常にいい子供だ。乳をしぼるところを見せてくれと云って遊びに行ったら躍りあがるように喜んで出てきて、時々人をいじめることもあったが、ドブ掃除だの物の運搬だの力仕事というと自分で引受けて、黙々と一人でやりとげてしまう。先生、オレは字は書けないから叱らないでよ。その代り、力仕事はなんでもするからね、と可愛いことを云って私にたのんだ。こんな可愛い子がどうして札つきだと言われるのだから、第一、字が書けないということは咎むべきことではない。要は魂の問題だ。落第させるなどとは論外で

ある。

女の子には閉口した。五年生ぐらいになると、もう女で、中には生理的にすら女でないかと思われるのが二人いた。

私は始め学校の近くのこの辺でたつた一軒の下宿屋へ住んだが、部屋数がいくつもないので、同宿だ。このへんに海外殖^{しよくみん}民の実習的の学校があつて、東北の田舎まるだしの農家出の生徒と同宿したが、奇妙な男で、あたたかい御飯は食べない。子供の時から野良仕事で冷飯ばかり食つて育つたので、あたたかい御飯はどうしても食べる気にならないと云つて、さまざましてから食つている。ところが、この下宿の娘が二十四五で、二十貫もありそんな大女だが、これが私に猛烈に惚れて、私の部屋へ遊びにきて、まるでもうウワズつて、とりのぼせて、呂律^{ろれつ}が廻らないような、顔の造作がくずれて目尻^{めじり}がとけるような、身体がそわそわと、全く落付^{しやべ}なく喋^{しゃべ}つたり、沈黙したり、ニヤニヤ笑つたり、いきなりこの突撃には私も呆氣^{あっけ}にとられたものだ。そして私の部屋へだけ自分で御飯をたいて、いつもあたたかいのを持つてくるから、同宿の猫舌先生がわが身の宿命を嘆いたものである。この娘の狂恋ぶりには下宿の老夫婦も手の施す術^{すべ}がなく困りきっていた様子であつたが、私はそれ以上に困却して、二十日ぐらいで引越した。同宿者があつては勉強^{べんきやう}ができないから、

と云つて、引越しの決意を老夫婦に打ち開けると、そのホツとした様子は意外のほどで、又、私への感謝は全く私の予想もしないものだった。だからこの老夫婦はそれ以来常に私を賞揚し口を極めてほめたたえていたそうで、私にとつては思いもよらぬことであつたが、ところがこの娘の一人が私の組の生徒で、これが誰よりマセた子だ。親が私をほめるのが心外で、私に面と向つて、お父さんやお母さんが先生をとほめるから変だという。先生はそんないい人じゃないと言うのだ。こういう女の子供たちは私が男の悪童を可愛がつてやるのが心外であり、嫉^{ねた}ましいのである。女の子の嫉妬深さというものは二十の私の始めて見た意外であつて、この対策にはほとほと困却したものだつた。

私が引越したのは分教場の主任の家の二階であつた。代田橋にあつて、一里余の道だ。けれども分教場の子供達の半数はそれぐらい歩いて通つていて、私が学校へくるまでには生徒が三十人ぐらい一緒になつてしまふ。私は時に遅刻したが、無理もねえよ、若いんだからな、ゆうべはどこへ泊つてきたかね、などとニヤニヤしながら言うのがある。みんな家へ帰ると百姓の手伝いをする子供だから、片仮名も書けないけれども、ませていた。

分教場の主任は教師の誰かを下宿させるのが内職の一つで、私の前には本校の長岡という代用教員が泊つていたが、ロシア文学の愛好者で、変り者であつたが、蛙^カデンカンとい

う奇妙な持病があつて、蛙を見るとテンカンを起す。私のクラスが四年の時はこの先生に教わつたのだが、生徒の一人がチョークの箱の中へ蛙を入れておいた。それで先生、教室でビツクリ返つて泡を吹いてしまったそうで、あの時はビツクリしたよ、と牛乳屋の落第生が言つていた。彼が蛙を入れたのかも知れぬ。お前だろう、入れたのは、と訊いたら、そうでもないよ、とニヤニヤしていた。

この主任は六十ぐらいだが、精力絶倫で、四尺六寸という畸形的な背の低さだが、横にひろがつて隆々たる筋骨、鼻髭はなひげで隠しているがミツクチであつた。非常な癩かんしゃくもちで、だから小心なのであろうが、やたらに当りちらす。小使だの生徒には特別あたりちらすが、学務委員だの村の有力者にはお世辞たらたらで、癩癩を起すと授業を一年受持の老人に押しつけて、有力者の家へ茶のみ話に行つてしまふ。学校では彼のいない方を喜ぶので、授業を押しつけられても不平を言わなかつた。腹が立つと女房をブン殴つたり蹴とばしたり、あげくに家をとびだして、雑木林や竹藪へはいつて、木の幹や竹の木を杖でメチヤクチャに殴つている。それはまったく氣違ひであつたが、大変な力で、手が痛くないのか、五分間ぐらゐも、エイエイエイ、ヤアヤアヤアと氣合をかけて夢中になぐつてゐる。

この節の若者は、とか、青二才が、とか口癖であつたが、私は当時まったく超然居士こじで、

怒らぬこと、悲しまぬこと、憎まぬこと、喜ばぬこと、つまり行雲流水の如く生きようという心掛であるからビクともしない。尤も私に怒ると転居されて下宿料が上らなくなる怖れがあるから、そういうところは抜目がなくて、私にだけは殆ど当りちらさぬ。先生は全部で五人で、一年の山門老人、二年の福原女先生、三年の石毛女先生、この山門老人が又超然居士で六十五だから、麻布からワラジをはいて歩いて通ってくる。娘には市内で先生をさせ、結婚したがっているのだそうだが、ドッコイ、許されぬ、もう暫くは家計を助けて貰わねばならぬ、毎日もめているから毎日私達にその話をして、イヤハヤ色気づいてウズウズしておりますよ、アツハツハと言っている。子供が十人ちかいから生活が大変で、毎晩一合の酒に人生を托している。主任は酒をのまない。

小学校の先生には道德観の奇怪な顛倒がある。つまり教育者というものは人の師たるもので人の批難を受けないよう自戒の生活をしているが、世間一般の人間はそうではなく、したい放題の悪行に耽^{ふけ}ついているときめてしまつて、だから俺達だつてこれぐらいはよからうと悪いことをやる。当人は世間の人はもつと悪いことをしている、俺のやるのは大したことではないと思ひこんでいるのだが、実は世間の人にはとてもやれないような悪どい事をやるのである。農村にもこの傾向があつて、都会の人間は悪い、彼等は常に悪いことを

している、だから俺たちだつて少しぐらいはと考えて、実は都会の人よりも悪いことを行う。この傾向は宗教家にもある。自主的に思い又行うのでなく他を顧て思い又行うことがすでにいけないのだが、他を顧るのが妄想的なので、なおひどい。先生達が人間世界を悪く汚く解釈妄想しすぎているので、私は驚いたものであつた。

私が辞令をもらつて始めて本校を訪ねたとき、あなたの勤めるのは分校の方だからと、分校の方に住んでいる女の先生が送つてくれた。これが驚くべき美しい人なのである。こんな美しい女の人はそのときまで私は見たことがなかつたので、目がさめるといふ美しさは実在するものだと思つた。二十七の独身の人で、生涯独身で暮す考えだといふことを人づてにきいたが、何かしつかりした信念があるのか、非常に高貴で、慎しみ深く、親切で、女先生にありがちな中性タイプと違い、女らしい人である。私はひそかに非常にあこがれを寄せたものだ。本校と分校と殆ど交渉がないので、それつきり話を交す機会もなかつたが、その後数年間、私はこの人の面影を高貴なものにだきしめていた。

村のある金持、もう相当な年配の男だそうだが、女房が死んでその後釜にこの女の先生を貰いたいという。これを分校の主任にたのんだものだ。何百円とか何千円とかの謝礼という約束の由で、そのときのこの主任の東奔西走、授業をうつちやらかして馳け廻つて、

なにしろ御本尊の女先生が全然結婚自体に意志がないので無理な話だ。毎日八ツ当りで、その一二ヶ月というもの、そわそわしたこの男の粗暴というより狂暴にちかい癩癩は大変だった。

私は行雲流水を志していたから、別段女の先生に愛を告白しようとか、結婚したいなどとは考えず、ただその面影を大切なものに抱きしめていたが、この主任の暗躍をきいたときには、美しい人のまぼろしがこんな汚らしい結婚でつぶされてはと大変不安で、行雲流水の建前にも拘^{かかわ}らず、主任をひそかに憎んだりした。

石毛先生は憲兵曹長だかの奥さんで、実に冷めたい中性的な人であったが、福原先生はよいオバサンであった。もう三十五六であったろうが、なりふり構わず生徒のために献身するというたちで、教師というよりは保^ほ姆^ぼのような天性の人だ。だから独身でも中性的な悪さはなく、高い理想などはなかったが、善良な人であった。例の高貴な先生の親友で、偶像的な尊敬をよせていることも、私には快かった。多くの女先生は嫉妬していたのである。私が先生をやめたとき、お別れするのは辛いが、先生などに終つてはいけない、本当によいことです、と云つて、喜んでくれて、お別れの酒宴をひらいてうんとこき御馳走をこしらえてくれた。私は然し先生で終ることのできない自分の野心が悲しいと思つていた。

なぜ身を捧げることが出来ないのだろうか？

私は放課後、教員室にいつまでも居残っていることが好きであった。生徒がいなくなり、外の先生も帰ったあと、私一人だけジツと物思いに耽っている。音といえば柱時計の音だけである。あの喧けんそう噪な校庭に人影も物音もなくなるというのが妙に静寂をきわだててくれ、変に空虚で、自分というものがどこかへ無くなったような放心を感じる。私はそうして放心していると、柱時計の陰などから、ヤアと云って私が首をだすような幻想を感じた。ふと気がつくと、オイ、どうした、私の横に私が立っていて、私に話しかけたような気がするのである。私はその朦もうろう朧たる放心の状態が好きで、その代り、私は時々ふとそこに立っている私に話しかけて、どやされることがあった。オイ、満足しすぎちゃいけないぜ、と私を睨むのだ。

「満足はいけないのか」

「ああ、いけない。苦しまなければならぬ。できるだけ自分を苦しめなければならぬ」

「なんのために？」

「それはただ苦しむこと自身がその解答を示すだろうさ。人間の尊さは自分を苦しめるところにあるのさ。満足は誰でも好むよ。けだものでもね」

本当だろうかと思つた。私はともかくたしかに満足には淫していた。私はまったく行雲流水にやや近くなつて、怒ることも、喜ぶことも、悲しむことも、すくなくなり、二十のくせに、五六十の諸先生方よりも、私の方が落付と老成と悟りをもっているようだった。私はなべて所有を欲しなかつた。魂の限定されることを欲しなかつたからだ。私は夏も冬も同じ洋服を着、本は読み終ると人にやり、余分の所有品は着代えのシャツとフンドシだけで、あるとき私を訪ねてきた父兄の口からあの先生は洋服と同じようにフンドシを壁にぶらさげておくという笑い話がひろまり、へえ、そういうことは人の習慣にないことなのか、と私の方がびつくりしたものだ。フンドシを壁にぶら下げておくのは私の整頓の方法で、私には所蔵という精神がなかつたので、押入は無用であつた。所蔵していたものといえは高貴な女先生の幻で、私があるころバイブルを読んだのは、この人の面影から聖母マリヤというものを空想したからであつた。然し私は、あこがれてはいたが、恋してはいなかつた。恋愛という平衡を失つた精神はいささかも感じなかつたので、せめて同じこの分校で机を並べて仕事ができたらいいになアと、私の欲する最大のことはそれだけであつた。この人の面影は今ももう私の胸にはない。顔も思いだすことができず、姓名すら記憶にないのである。



私はそのころ太陽というものに生命を感じていた。私はふりそぐ陽射しの中に無数の光りかがやく泡、エーテルの波を見ることができたものだ。私は青空と光を眺めるだけで、もう幸福であつた。麦畑を渡る風と光の香気の中で、私は至高の歓喜を感じていた。

雨の日は雨の一粒一粒の中にも、嵐の日は狂い叫ぶその音の中にも私はなつかしい命を見つめることができた。樹々の葉にも、鳥にも、虫にも、そしてあの流れる雲にも、私は常に私の心と語り合う親しい命を感じつつづけていた。酒を飲まねばならぬ何の理由もなかった。私に、私は酒を好まなかつた。女の先生の幻だけでみたされてお、女の肉体も必要ではなかつた。夜は疲れて熟睡した。

私と自然との間から次第に距離が失われ、私の感官は自然の感触とその生命によつて充たされている。私はそれに直接不安ではなかつたが、やっぱり麦畑の丘や原始林の木暗い下を充ちたりて歩いているとき、ふと私に話かける私の姿を木の奥や木の繁みの上や丘の土肌の上に見るのであつた。彼等は常に静かであつた。言葉も冷静で、やわらかかつた。

彼等はいつも私にこう話しかける。君、不幸にならなければいけないぜ。うんと不幸に、ね。そして、苦しむのだ。不幸と苦しみが人間の魂のふるさとなのだから、と。

だが私は何事によつて苦しむべきか知らなかった。私には肉体の慾望も少なかった。苦しむとは、いつたい、何が苦しむのだろう。私は不幸を空想した。貧乏、病気、失恋、野心の挫折、老衰、不知、反目、絶望。私は充ち足りているのだ。不幸を手探りしても、その影すらも捉えることはできない。叱責を怖れる悪童の心のせつなさも、私にとってはなつかしい現実であつた。不幸とは何物であろうか。

然し私はふと現れて私に話しかける私の影に次第に圧迫されていた。私は娼家へ行つてみようか。そして最も不潔なひどい病気にでもなつてみたらいいのだろうか、と考へてみたりした。

私のクラスに鈴木という女の子がいた。この子の姉は実の父と夫婦の關係を結んでいるという隠れもない話であつた。そういう家自体の罪惡の暗さは、この子の性格の上にも陰鬱な影となつて落ちており、友達と話をしていることすらめつたになく、浮々と遊んでいることなどは全くない。いつも片隅にしょんぼりしており、話しかけるとかすかに笑うだけなのである。この子からは肉体が感じられなかった。

私は不幸ということに就て戸惑いするたびに、この十二の陰鬱な娘の姿を思い出した。

石津という娘と、山田という娘がいた。私はこの二人は生理的にももう女ではないのだろうかと時々疑つたものだが、石津の方は色っぽくて私に話しかける時などは媚こびるような色気があつたが、そのくせ他の女生徒にくらべると、嫉妬心だの意地の悪さなどは一番すくなく、ただやがて弄もてあそばれるふくよかな肉体だけしかないような気がする。これも余り友達などはない方で、女の子にありがちな、親友と徒党的な垣をつくるようなことが性格的に稀薄なようだ。そのくせ明るくて、いつも笑つてポカンと口をあけて何かを眺めているような顔だつた。

山田の方は豆腐屋の子で、然し豆腐屋の実子ではなく、女房の連れ子なのである。その妹と弟は豆腐屋の実子であつた。この娘は仮名で名前だけしか書けない一人で、女の子の中で最も腕力が強い。男の子と対等で喧嘩をして、これに勝つ男はすくないので、身体も大きかつたが、いつも口をキツと結んで、顔付はむしろ利巧そうに見える。陰性というのとも違う、何か思いつめているようで、明るさがなく、全然友達がない。喋ることに喜びを感じることはないように人と語り合うことがすくなく、それでも沈黙がちに遊戯の中へ加わつて極めて野性的にとび廻っている。笑うことなどはなく、面白くもなさそうだが、

然し跳ね廻っている姿は他の子供に比べると格段にその描きだす線が大きく荒々しく、まったく野獣のような力がこもっていて、野性がみちていた。そのくせ色気が乏しい。大胆不敵のようだが、実際は、私は他の小さなたわいもない女生徒の方に実はもつと本質的な女自体の不敵さを見出していたもので、嫉妬心だの意地の悪さだの女性的なものが少いのである。今は早熟の如くでも、すべてこれらの子供達が大人になったときには、結局この娘の方が最後に女から取り残され、あらゆる同性に敗北するのではないかと私は思った。

この娘の母親がある一夜私を訪ねてきたことがある。この娘の特別の事情、つまり、何人かの妹弟の中でこの娘だけが実子でないために性格がひねくれていることを説明して、父母の方では別に差別はしていないのだから、もつと父に打ちとけるように娘にさとしてくれというのだ。この母親は淫奔な女だという評判で、まったく見るからに淫奔らしい三十そこそこの女であった。いや、ひねくれてはおりません、と私は答えた。ひねくれたように見えるだけです。素直な心と、正しいものをあやまずに認めてそれを受け入れる立派な素質を持っています。私の説教などは不要です。問題はあなた方の本当の愛情です。私がいちばん心配なのは、あの娘は、人に愛される素質がすくない。女として愛される素質がすくない。ひねくれのせいではないのです。あの娘は人に愛されたことがないので

ありませんか。先ず親に、あなた方に愛されたことがないのでありませんか。私に説教してくれなんて、とんでもないお門違いですよ。あなたが、あなたの胸にきいてごらん下さい。

この母親はちつとも表情を表わさずに、私の言葉をとりとめのない漠然たる顔付できいていた。これも仮名で名前しか書けない一人だろうと私は思った。ただ、子供とはあべこべに、徹頭徹尾色つぼく、肉慾的だ。最も女であつた。その淫奔な動物性が、娘の野性と共通しているだけだつた。娘は大柄であるのに、母親はひどく小柄であつた。顔はどちらも美人の部類である。二三分だまつていたが、やがてひどく馴れ馴れしく世間話をして帰つて行つた。

鈴木と並べて石津と山田を私は思いだす習慣になつていた。この三人の未来には不幸のみが待ち構えているように思われてならない。私は不幸というものを、私自身に就てでなしに、生徒の影の上から先ず見凝めはじめていたのだ。その不幸とは愛されないということだ。尊重されないということだ。石津の場合はただオモチャにされ、私はやがて娼婦となつて暮している喜怒哀楽の稀薄な、たわいもない肉塊を想像した。私は実際の娼家も娼婦も知らなかつたが、まったく小説などから得たものの中で現実を組み立てていたのであ

る。然し私の予感は今でも当っていたように考えている。

石津は貧しい家の娘で、その身体にはいっぱい風しらみがたかっていた。外の子供がそう云つて冷やかす。キリリと怒るような顔になるが、やがて又たわいもない笑い顔になつてしまふ。善良というよりも愚かという魂が感じられる。読み書きはともかく出来て、中くらいの成績なのだが、人生の行路では、仮名も知らない女よりも処世うとに疎うとくて、要するに本当の生長がないような愚な魂がのぞけて見えるのだ。そのくせ、ひどく色っぽい。ただ、それだけだ。

私は先生をやめるとき、この娘を女中に譲り受けて連れて行こうかと思つた。そうして、やがて自然の結果が二人の肉体を結びつけたら、結婚してもいいと思つた。まったくこれは奇妙な妄想であつた。私は今でも白痴的な女に妙まに惹ひかれるのだが、これがその現実に於ける首はしまりで、私は恋情とか、胸の火だとか、そういうものは自覚せず、極めて冷静に、一人の少女とやがて結婚してもいいと考え耽たつていたのである。

私は高貴な女先生の顔はもうその輪郭すらも全く忘れて思い描くよしもないが、この三人の少女の顔は今も生々しく記憶している。石津はオモチャにされ、踏みつけられ、虐しいたげられても、いつもたわいもなく楽天的なような気がするのだが、むろん現実ではそんな筈

はない。虱たかりと云われて、やっぱり一瞬はキリリとまなじりを決するので、踏みだかれて、路上の馬糞のように喘あえいでいる姿も思う。私の予感あえは当っていて、その後娼家の娼婦に接してみると、こんな風なたわいもない楽天家に屢しばしば々々めぐりあつたものである。



私は近頃、誰しも人は少年から大人になる一期間、大人よりも老成する時があるのではないかと考えるようになった。

近頃私のところへ時々訪ねてくる二人の青年がいる。二十二だ。彼等は昔は右翼団体に属していたこちこちの国粹主義者だが、今は人間の本当の生き方ということを考えているようである。この青年達は私の「墮落論」とか「淪落論りんらく」がなんとなく本当の言葉であるようにも感じているらしいが、その激しさについてこれないのである。彼等は何よりも節度を尊んでいる。

やっぱり戦争から帰ってきたばかりの若い詩人と特攻くずれの編輯者がいる。彼等は私の家へ二三日泊り、ガチャガチャ食事をつくってくれたり、そういう彼等には全く戦陣の

影がある。まったく野戦の状態で、野放しにされた荒々しい野性が横溢おういつしているのである。然し彼等の魂にはやはり驚くべき節度があつて、つまり彼等はみんな高貴な女先生の面影を胸にだきしめているのだ。この連中も二十二だ。彼等には未だ本當の肉体の生活が始まつていない。彼等の精神が肉体自体に苦しめられる年齢の発育まできていないのだろう。この時期の青年は、四十五十の大人よりも、むしろ老成している。彼等の節度は自然のもので、大人達の節度のように強いて歪ゆがめられ、つくりあげられたものではない。あらゆる人間がある期間はカンジダなだと私は思う。それから墮ちるのだ。ところが、肉体の墮ちると共に、魂の純潔まで多くは失うのではないか。

私は後年ボルテールのカンジダを読んで苦笑したものだが、私が先生をしているとき、不幸と苦しみの漠然たる志向に追われ、その実私には不幸や苦しみを空想的にしか捉えることができない。そのとき私は自分に不幸を与える方法として、娼家へ行くこと、そして最も厭な最も汚らしい病気になつては、と考えたものだ。この思いつきは妙に根強く私の頭に絡からみついていたものである。別に深い意味はない。外に不幸とはどんなものか想像することができなかつたせいだろう。

私は教員をしている間、なべて勤める人の処世上の苦痛、つまり上役との衝突とか、い

じめられるとか、党派的な摩擦とか、そういうものに苦しめられる機会がなかった。先生
の数が五人しかない。党派も有りようがない。それに分教場のことで、主任といっても校
長とは違うから、そう責任は感じておらず、第一非常に無責任な、教育事業などに何の情
熱もない男だ。自分自身が教室をほったらかして、有力者の縁談などで東奔西走している
から、教育という仕事に就ては誰に向つても一言半句も言うことができないので、私は音
楽とソロバンができないから、そういうものをぬきにして勝手な時間表をつくつても文句
はいわず、ただ稀れに、有力者の子供を大事にしてくれということだけ、ほのめかした。
然し私はそういうことにこだわる必要はなかったので、私は子供をみんな可愛がっていた
から、それ以上どうする必要も感じていなかった。

特に主任が私に言ったのは萩原という地主の子供で、この地主は学務委員であつた。こ
の子は然し本来よい子供で、時々いたずらをして私に怒られたが、怒られる理由をよく知
っているのだ、私に怒られて許されると却つて安心するのであつた。あるとき、この子供
が、先生は僕ばかり叱る、といつて泣きだした。そうじゃない。本当は私に甘えている我
がままなのだ。へえ、そうかい。俺はお前だけ特別叱るかい。そう云つて私が笑いだした
ら、すぐ泣きやんで自分も笑いだした。私と子供とのこういうつながりは、主任には分ら

なかつた。

子供は大人と同じように、ずるい。牛乳屋の落第生なども、とてもずるいにはずるいけれども、同時に人のために甘んじて犠牲になるような正しい勇氣も一緒に住んでいるので、つまり大人と違うのは、正しい勇氣の分量が多いという点だけだ。ずるさは仕方がない。ずるさが悪徳ではないので、同時に存している正しい勇氣を失うことがいけないのだと私は思った。

ある放課後、生徒も帰り、先生も帰り、私一人で職員室に朦朧もうろうとしていて、外から窓のガラスをコツコツ叩く者がある。見ると、主任だ。

主任は帰る道に有力者の家へ寄つた。すると子供が泣いて帰ってきて、先生に叱られたという。お父さんが学務委員などをして威張っているから、先生が俺を憎むのだ。お父さんの馬鹿野郎、と云つて、大変な暴れ方で手がつけれない。いったい、どうして、叱つたのだ、と言うのである。

あいにく私はその日はその子供を叱つてはいないのである。然し子供のやることには必ず裏側に悲しい意味があるので、決して表面の事柄だけで判断してはいけないものだ。そうですね。大したことではないけれど、叱らねばならないことがあつたから叱つただけで

す、じゃ、君、と、主任はいやらしい笑い方をして、君、ちよつと、出掛けて行って釈明してくれ給え。長い物にはまかれろというから、仕方がないさ、へっへ、という。主任はへっへという笑い方を屢々つけたす男であつた。

「僕は行く必要がないです。先生はお帰りの道順でしようから、子供に、子供にだけです、ここへ来るように言つただけませんか」

「そうかい。然し、君、あんまり子供を叱つちや、いけないよ」

「ええ、まあ、僕の子供のことは僕にまかせておいて下さい」

「そうかい。然し、お手やわらかに頼むよ、有力者の子供は特別にね」

と、その日の主任は虫の居どころのせいとか、案外アツサリびよこびよこ歩いて行つた。私は今まで忘れていたが、彼はほんの少しだがビッコで、ちよつと尻を横つちよへ突きだすようにびよこびよこ歩くのである。だが、その足はひどく速い。

まもなく子供はてれて笑いながらやつてきて、先生と窓の外からよんで、隠れている。私はよく叱るけれども、この子供が大好きなのである。その親愛はこの子供には良く通じていた。

「どうして親父をこまらしたんだ」

「だって、癩しやくだもの」

「本当のことを教えろよ。学校から帰る道に、なにか、やったんだろう」

子供の胸にひめられている苦悩おのうは、大人と同様に、むしろそれよりもひたむきに、深刻なのである。その原因が幼稚であるといって、苦悩自体の深さを原因の幼稚さで片づけてはいけない。そういう自責や苦悩の深さは七ツの子供も四十の男も変りのあるものではない。

彼は泣きだした。彼は学校の隣の文房具屋で店先の鉛筆を盗んだのである。牛乳屋の落第生におどかされて、たぶん何か、おどかされる弱い尻尾があつたのだろう、そういうことは立入ってきいてやらない方がいいようだ、ともかく仕方なしに盗んだのである。お前の名前など言わずに鉛筆の代金は払っておいてやるから心配するなと云うと、喜んで帰って行った。その数日後、誰もいないのを見すましてソツと教員室へやってきて、二三十銭の金をとりだして、先生、払ってくれた？　とききにきた。

牛乳屋の落第生は悪いことがバレて叱られそうな気配が近づいているのを察すると、ひどくマメマメしく働きだすのである。掃除当番などを自分で引受けて、ガラスなどまでセツセと拭いたり、先生、便所がいつぱいだからくんでやろうか、そんなことできるのか、

俺は働くことはなんでもできるよ、そうか、汲んだものをどこへ持ってくのだ、裏の川へ流しちゃうよ、無茶言うな、ザツとこういうあんばいなのである。その時もマメマメしくやりだしたので、私はおかしくて仕方がない。

私が彼の方へ歩いて行くと、彼はにわかに後じさりして、

「先生、叱っちゃ、いや」

彼は真剣に耳を押えて目をとじてしまった。

「ああ、叱らない」

「かんべんしてくれる」

「かんべんしてやる。これからは人をそそのかして物を盗ませたりしちゃいけないよ。どうしても悪いことをせざるにいられなかつたら、人を使わずに、自分一人でやれ。善いことも悪いことも自分一人でやるんだ」

彼はいつもウンウンと云つて、きいているのである。

こういう職業は、もし、たとえば少年達へのお説教というものを、自分自身の生き方として考えるなら、とても空虚で、つづけられるものではない。そのころは、然し私は自信をもっていたものだ。今はとてもこんな風に子供にお説教などはできない。あの頃の私は

まったく自然というものの感触に溺れ、太陽の讃歌のようなものが常に魂から唄われ流れていた。私は臆面もなく老成しきつて、そういう老成の実際の空虚というものを、さとらずにいた。さとらずに、いられたのである。

私が教員をやめるときは、ずいぶん迷った。なぜ、やめなければならぬのか。私は仏教を勉強して、坊主になろうと思ったのだが、それは「さとり」というものへのあこがれ、その求道のための厳しさに対する郷愁めくものへのあこがれであった。教員という生活に同じものが生かされぬ筈はない。私はそう思ったので、さとりへのあこがれなどというけれども、所詮名誉慾というものがあつてのことで、私はそういう自分の卑しさを嘆いたものであった。私は一向希望に燃えていなかった。私のあこがれは「世を捨てる」という形態の上にあつたので、そして内心は世を捨てることが不安であり、正しい希望を抛棄している自覚と不安、悔恨と絶望をすでに感じつつづけていたのである。まだ足りない。何もかも、すべてを捨てよう。そうしたら、どうにかなるのではないか。私は気違いじみたヤケクソの気持で、捨てる、捨てる、捨てる、何でも構わず、ただひたすらに捨てることを急ごうとしている自分を見つめていた。自殺が生きたい手段の一つであると同様に、捨てるというヤケクソの志向が実は青春の登あしおと音のひとつにすぎないことを、やっぱり感じつつ

けていた。私は少年時代から小説家になりたかったのだ。だがその才能がないと思いついていたので、そういう正しい希望へのてんからの諦めが、底に働いていたこともあったろう。

教員時代の変に充ち足りた一年間というものは、私の歴史の中で、私自身でないような、思いだすたびに嘘のような変に白々しい気持がするのである。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集」ちくま文庫、筑摩書房

1990（平成2）年3月27日第1刷発行

底本の親本：「いづこへ」真光社

1947（昭和22）年5月15日発行

初出：「文芸 第四卷第一号（新春号）」

1947（昭和22）年1月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、以下に限って、大振りにつくっています。

「その一二ヶ月というもの」

入力：砂場清隆

校正：伊藤時也

2005年12月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風と光と二十の私と

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>